

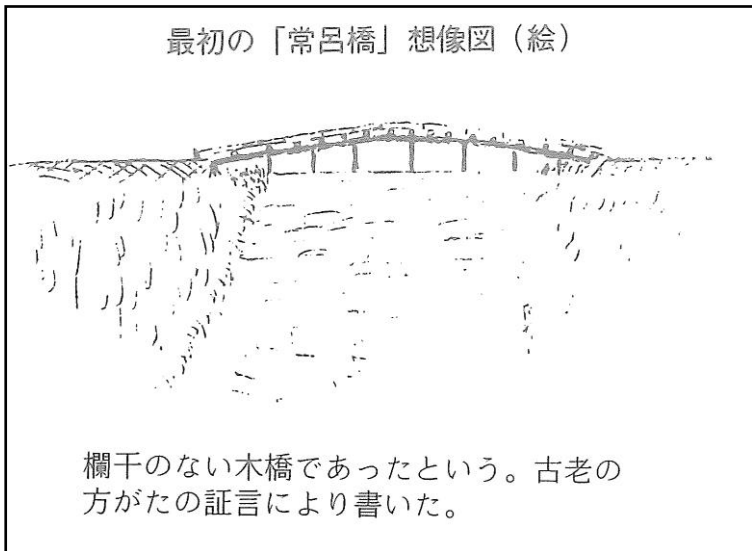
私たちの生活と橋(その1)

私たちが安心して、快適に暮らしていくために道路や橋は欠くことができない重要な社会資源です。

しかし、日常生活の中で道路や橋についてどうして造られたのか、またどんな経緯があったのかについて関心が薄いように感じられます。

よって、今回から端野町内の主要な「橋」の歴史について触れさせていただきます。

最初の「常呂橋」想像図(絵)



欄干のない木橋であったという。古老の方がたの証言により書いた。

出典：端野の夜明け(第二集)

○端野町での初めての橋は

「常呂橋」と「二間橋」

明治二四(一八九一)年、旭川から網走間の「中央道路」が開削されましたが、この道路における端野地区内での橋の架設は常呂川の一区、二区間に架設された木橋の「常呂橋」とトペンピラウシナイ川に架設された木橋の「二間橋」が端野町内での初めての橋でした。(裏面の「一区、二区における常呂川の変化と道路・橋の関係図」を参照ください。)

この両橋は、明治三一(一八九八)年九月に大洪水で流失してしまいました。この大洪水により、屯田兵第二中隊一区兵村では兵屋六戸が流失し、兵村を高台地に移転しました。なお、常呂橋、二間橋は架け替えられました。

○新道の開削と「豊穰橋」の新設

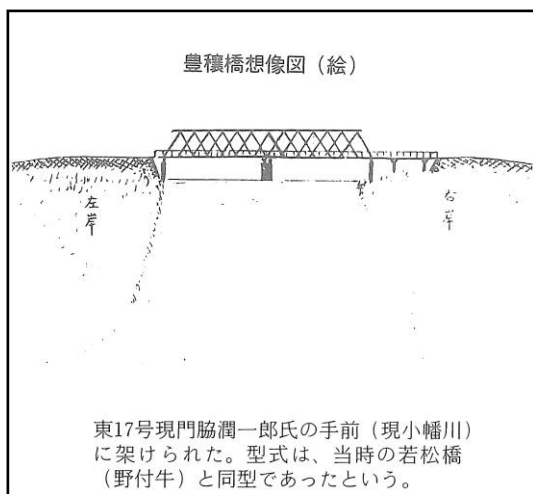
明治三七(一九〇四)年、同三九(一九〇六)年も洪水により橋が流失したため、洪水を避けるために橋の位置を変更することとなり、明治四二(一九〇九)年、一区から常呂川の右岸を通り、東一七号線付近で左岸に渡り、東一六号下手で中央道路に接続する新道「上常呂原野道路」(仮県道)を開削し、この道路において、トペンピラウシナイ川に延長十間余(約一八m)の「万歳橋」と東一七号線の常呂川に延長三八間(約七〇m)、幅員二間(約三・六m)の「豊穰橋」を新設しました。

これにより、一区から二区までの間の中央道路区間は廃止となりましたが、農作業に必要なこと

から道路を残し、常呂橋を常栄橋と改め、使用することにしました。

この新道の開削と新橋の架橋により、一区、二区間の一般通行は、新道を万歳橋―豊穰橋―二区東一六号線の順路で中央道路に接続することとなりました。

豊穰橋想像図(絵)



東17号現門脇潤一郎氏の手前(現小幡川)に架けられた。型式は、当時の若松橋(野付牛)と同型であったという。

○新川橋の架橋

新設した豊穰橋も、大正二(一九一三)年、同五(一九一六)年の洪水で破損したため補修して使用しましたが、この補修期間は「渡し船」か、東一四号線に架けられている「鉄橋」によるしかなく、児童の通学が危険なため、一区地区では一区神社の拝殿を利用して授業を行いました。

大正八(一九一九)年八月の大洪水は、常呂川に架設されている全ての橋が破損するとともに、流域にある農地も冠水し流失したため、常呂川の流

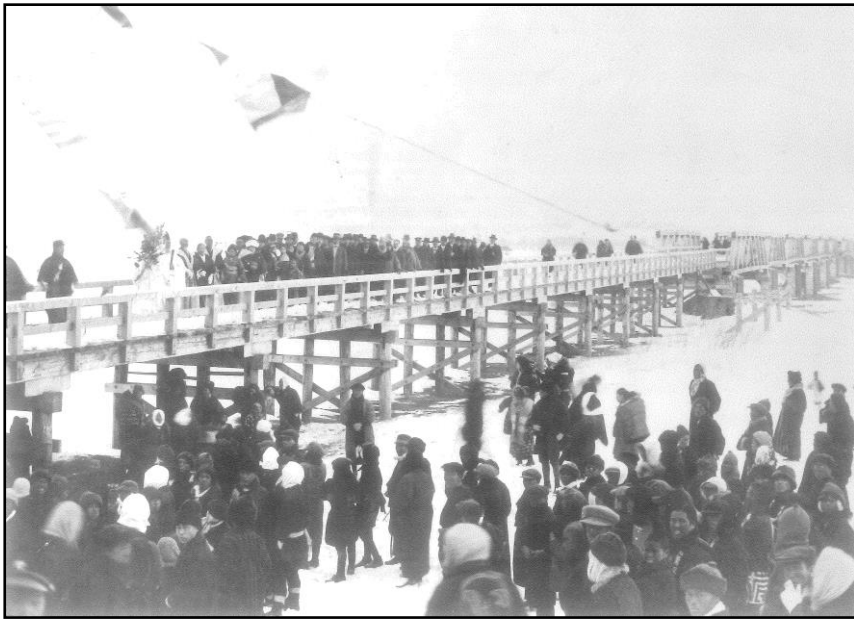
出典：端野の夜明け(第二集)

破損、流失した橋は補修や仮橋の架設、あるいは渡し船等に対応してきましたが、さらに、大正一（一九二二）年八月の大洪水は、鉄道付近から一直線に流れる濁流は大正八年に万歳橋付近で分断された新川に流れ込み、この流れが常呂川の本流になりました。

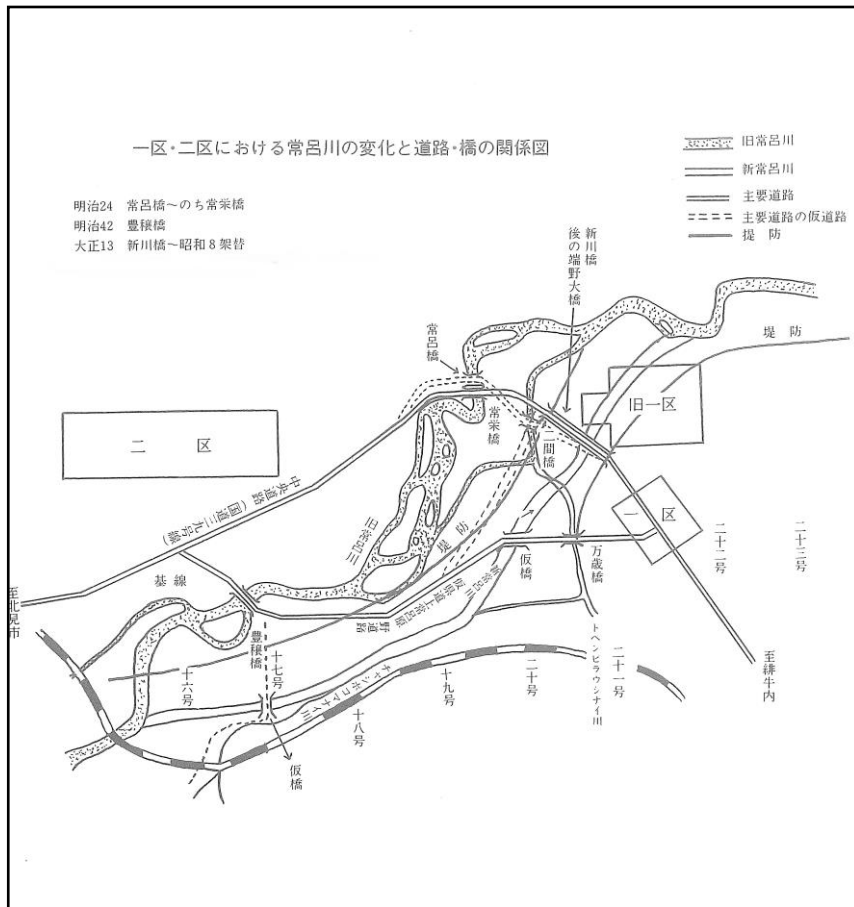
大正八（一九一九）年の大洪水を教訓として、頑強な新しい橋の架設運動が始まった中で、大洪水は、新橋建設の必要性を決定的にし、新川に堤防を設置する工事が始まると共に、大正二二（一九三三）年から、旧中央道路の新常呂川に新しい橋の仮設工事が始まりました。

橋長二四〇間（約四三六m）、木造ですが橋脚はコンクリート造、幅員が二間（約三・六m）とせまく馬車が一台しか通ることができないため、中間に二、三カ所の待機所が設けられました。大正一三（一九二四）年三月、北海道内で二番目に長い橋として完成しました。この橋は、新川にちなんで「新川橋」と命名し、以来、流失するとはありませんでした。

〇一区、二区における常呂川の変化と橋の関係図
 変化と橋の関係図
 明治二四（一九〇一）年、中央道路の端野地区内に架設された「常呂橋」から、大正一三（一九二四）年に新設された「新川橋」までの道路の變化と橋の架設の経緯は、次の通りです。



出典：新端野町史



出典：端野の夜明け（第二集）